

# ハイデガー思想における生命論的思考の解明 死すべきものの自由をめぐって

著者	信太 光郎
号	21
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第311号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59402">http://hdl.handle.net/10097/59402</a>

# し だ みつ お 信 太 光 郎

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 311 号
学位授与年月日	平成21年 7 月16日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 文化科学専攻
学 位 論 文 題 目	ハイデガー思想における生命論的思考の解明 —死すべきものの自由をめぐる—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 座小田 豊 教 授 野 家 啓 一 教 授 戸 島 貴代志 准教授 荻 原 理 准教授 直 江 清 隆

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 序 ハイデガーの生命論的思考とは

本稿の目論見は、ハイデガー思想の全体を、その生命論的思考の展開されたものとして統一的に解釈していくことにある。ここでいうハイデガーの生命論的思考とは、人間の「生命=生きること Leben」の経験に降り立って、そこから思考の可能性そのものを汲みだしていく試みとしてとりあえず規定される。人間の生きることが、学問的な主題化（たとえば生命科学による）に先立って、ある特権的な哲学的な問題領域をなすという洞察は、ハイデガーの思考をその最初期から導いていたものであったが、それがやがて、『存在と時間』の「基礎的存在論」という構想に結実していくことになる。そこでは、存在者一般の存在を与える「基礎」が、人間の存在様態である生きることにおいて担われている様が問われていくのである。こうしたハイデガーの企図が、デカルト的なコギトの構想を念頭においていることは容易に推測される。ハイデガーは実際に、デカルトをへて近代思想へと極まっていく運命にあった西洋形而上学の思考様式を批判的に見据えながら、そこで見逃されてきた次元を、人間がその生のうちに引き受けているロゴスの消息として示そうとする。

具体的には、不死なる不動の基礎を措定する形而上学的=神学的な思考様式に抗して、人間が「死すべきもの」として誕生して生きているという生命論的事実の「根本確実性」ととどまって、そこから、存在者一般の存在を与えるとともに人間的思考を可能にするような、ある原初的ロゴスの働きが取り出されていく。ハイデガーは、そのロゴスに対する人間のすぐれて有限的な関係に着目して、そこにまさ

に、死すべきものとして生きることの「自由」を定義しようとするのであるが、本稿ではこうしたハイデガーの生命論的思考の展開を、「存在」、「力」、「時間」というそれぞれの観点によって解明していくことになる。

## 第1章 存在の両義性

人間という存在者が存在者一般の存在の基礎を担うものであるというハイデガーの議論は、決して人間を「第一者 to prōton」として主張していくものではない。それどころかその議論は、そうした第一者を仮構するような思考様式そのものを脱構築していくことを要求するのである。人間が第一者ならざる仕方で、存在者一般の「一性 hen」を引き受けるありかたを、ハイデガーは「そこ＝現 Da」と名づける。そうした「現・存在」としての人間が存在者一般の基礎を担うありかたは、その一性を受けけるとともに、その一性によって自らが存在者として存在せしめられているという二重性に特徴がある。「存在論的差異」と名づけられるこの問題性の領域は、形而上学の思考がたえず見過ごしてきたものだとしてハイデガーは考えている。その事態は、人間的思考のありかたの理想として、神的な第一者によるロゴスを求める古代ギリシアの「存在論・神学」にはじまって、いわゆる「人間主義（ヒューマニズム）」へと歴史的に構成されてくると考えられている。ハイデガーのいう人間主義とは、おのれの「人間性」をなんらか積極的に定立する身振りのうちに、存在者一般の「そこ＝現」を担った人間の立場の二重性を思考しないような人間的思考のあり方にほかならない。ハイデガーはそうした人間主義の成立を、人間が自らの生きることを捉えてきた歴史的消息に問うていくことになるのである。人間は古来一般に、„zōon logon echon“（ロゴスをもって生きるもの）として捉えられてきたが、それが「理性的動物 animal rationale」として翻訳＝解釈されるにいたったとき（つまり人間的思考のロゴスの座としての „psychē“ が「動物魂 anima」と解釈され、„logos“ が「理性 ratio」と解釈されたとき）、ハイデガーによると、「人間性 humanitas」は決定的な仕方で「動物性 animalitas」へと押し込められていったのである。こうした洞察を踏まえて、ハイデガーの生命論的思考はいまや、人間が人間性＝動物性へと放逐されるのではなく、真に人間的に生きることとはどういうことかということに向かうことになるのだが、本稿ではそのハイデガーの問いを、人間の〈生命性 vitalitas〉の問いとして再構成していく。

その〈生命性〉にもとづいた、人間的思考のロゴスというものは、存在者一般の「そこ＝現」として人間のおかれた立場の二重性を受け取ることができるものでなければならない。それはつまり、存在者一般の一性を統べる原初的ロゴスに対する人間的思考のロゴスの有限性に関わっているものでなくてはならない。ハイデガーはそれを、人間の根源的有限性の思想として展開する。ここでいう根源的とは、文字通り存在者一般の一性という「根源」に関わるという意味である。そのハイデガーの思想はさしあたり、根源を所有しない人間的思考（＝感性的直観）の有限性というカント認識論の議論を踏まえているわけだが、しかしハイデガーはそれを、カントがそうであったように、根源の一性を所有する第一者の根源性を肯定した意味でいっているのではない。根源性とはあくまでも、所有しえないものである根源の一性に対する相応しい関わり方に関していわれるべきであり、そうだとすれば、人間的思考が、所有するのではない仕方で根源の一性の「そこ＝現」を受け取っているあり方、つまり、その有限性において人間＝現存在という二重性を受け取っているあり方が、すなわち正しい意味で根源的なあり方なのである。

人間的思考がその根源的有限性において成立しているということから、そこに特有の思考の論理（ロゴス）が見いだされることになる。存在者一般の根源の一性をめぐる形而上学の伝統的な存在論の思考は、その所有可能性を前提にした充実と欠如という枠組みにもとづいて、存在と無の論理を構築してき

たのであった。そして弁証法がその論理を根底化していったとき、そこでは「存在そのものが本質において有限である」ということがもはや思考されなくなっていくとハイデガーは考える。存在が有限であるということ、言い換えれば、存在がそれ自体で無的であるというのはどういうことか。それは、存在が他でもない「そこ＝現」において、つまりは、二重性の立場を引き受けた人間＝現存在の根源的有限性における、その有限的思考のロゴスにおいて与えられるということなのである。人間の有限的思考のロゴスは、こうしていまや充実と欠如の論理の手前において、存在と無の両義性の論理において作動しているものとして見いだされなければならない。ハイデガーはそれをまさしく、人間の〈生命性〉を規定するいわば生命論的な論理として理解していこうとしている。ハイデガーの生命論的思考が、人間が誕生し死んでいくという生命論的事実に定位するとき、それは決して、生の持続に対する外的な限界づけの契機として誕生や死を捉えるような（つまりは充実と欠如の論理にもとづいた）、通俗的な意味での生の有限性を問題にするためではない。「そこ＝現」であることの二重性を受け受けた根源的有限性においてある人間が、その〈生命性〉における積極的な表現をもつ場所が、つまりその生命論的事実なのであり、その積極性がハイデガーにおいていまや、死すべきものの自由として考えられていくのである。その自由に根ざした、存在と無の両義性の論理にもとづいた人間の有限的思考における積極的なロゴスの作動のあり方を、ハイデガーは究極的には「言葉」の成り立ちとして考えていこうとしているのであるが、このことは、のちに時間の問題を踏まえて、より立ち入った仕方では説明されなければならない。

## 第2章 力の反転性

存在と無の両義性の論理にもとづいた、死すべきものの自由のあり方の具体相が問われていったものが、『存在と時間』を中心にして展開された、「被投的投企」としての「世界 - 内 - 存在」という議論であった。ハイデガーのその議論は、人間の自己投企により存在者一般の「そこ＝現」が、「世界」へと構成されていくあり方を明らかにしていこうとするものであったわけだが、その世界構成の消息が、目的論的な用具連関構造との対比において、人間の「死に臨む」というあり方のうちに問われていく。これは、人間の自己投企をめぐる、その「終末」論（テレオロジー）の問い返しを試みでもある。こうしたハイデガーの議論を根底で導いているのは、人間の自己投企を通じて働いている、存在者一般を存在せしめる「力」のあり方をめぐる問いなのである。用具連関の議論が問うのは、人間の制作者的な力の行使、いわゆる「テクネー」のあり方であり、それは、その力が作品において「現実化 Verwirklichen」されて、完結されたものとして制作者の自己に現前化されること、そうしてその存在者の根源を所有することを目指すものである。それは、ハイデガーによるカント自由論の道德目的論との対決をも導いていく。カントによる道德的意志＝純粹意志という思想も結局は、伝統的な制作者の形而上学における目的論的な自己投企のあり方にもとづいているとハイデガーは解釈する。それが自由を「因果性」として規定するカントの議論の背景をなしているとされる。カントにおいてはそうした自己投企のあり方が、世界構成における道德目的論というかたちで普遍化されて、自己現前性という理念になっている。そしてそこには、「恒常的現前性」＝「不死性」という形而上学の存在の理念が現れてくる。

それに対するに、自己投企が「死に臨む」ことに関わって、ハイデガーがいま「可能性 Ermöglichung」と名づけるものは、その脱現前化的で脱完結的な特質において、生命論的な力の作動を指し示しているのである。この「ピュシス」としての力の消息についてハイデガーは、制作者的な思考の偏差をとりあえず括弧に置いて、プラトンとアリストテレスの力の議論にそくして解き明かしていこうとしているのを見ることが出来る。プラトンの議論における、「太陽」そのものと「太陽的なもの」、「善」そのものと「善的なもの」という力の差別化の議論、前者が後者に対して「より高く評価される」

という議論が解きほぐされていくなか、前者（つまり根源の一性）の「そこ＝現」でありつつも、後者でしかありえない人間＝現存在の二重性、つまりその根源的有限性が捉え直されていく。そしてアリストテレスの力の議論にそくしては、力が本質的に「分裂性」をはらむことが解明されていくのだが、それはもちろん、人間における力の作動が、存在と無の両義性の論理にのっとった被投的投企であることを示そうとするものなのである。こうしたいわば力の「内的な有限性」という思想が、人間の世界構成をめぐるハイデガーの議論をやがて、芸術作品論に託された、「世界と大地の闘争」という思想へと導いていくことになる。

しかしそれにしても、生命論的な力の作動を引き受けた死すべきものとしての自己投企、その自由とはいかなるものであろうか。自己投企を「行動 Akt, Aktion」へと作品化する制作者のあり方と対照的に、ハイデガーはそれを「始めること Anfangen」の生起を担った「行為 Handeln」の可能性として問うていくことになる。その際には、力の作動をめぐる力学的論理の区別が問題にされていくことになる。制作者の行動における力学的論理は、「より力強く potius quam」という比量性の論理として定式化されていく。直接にはライプニッツの根拠律の命題に注目して摘出されたこの定式は、形而上学の思考において人間の根源的有限性が踏み越えられていってしまうあり方の規定として捉えられていく。

ハイデガーの考えによれば、プラトンのイデア論による力の差別化の議論（「より高く評価される」）もまた、それが人間＝現存在の根源的有限性の解明を目指すものであったのにもかかわらず、当初からこの比量性の力学的論理によって上書きされていったのであって、こうして人間の根源的有限性は、西洋の形而上学の端緒においてすでに見過ごされていったことになるのである。

ハイデガーにとって形而上学の「歴史」とはいまや、その比量性の力学的論理によって自らを体制化していった思考様式そのものを意味するのであるが、まさにそれを克服するべくハイデガーが取り出そうとしていたものが、生命論的な反転性の力学的論理なのである。死すべきものの自由における始めることの生起への問いは、この反転性の力学的論理をいかに把握するかということになるわけだが、ハイデガーの前期思想の議論では、それは不十分な扱いにとどまっていた。その問題が本格的に取り組まれていくことになるのは、中期思想以降に展開されるその革命論的思考によってである。そうしたハイデガーの思考の局面は、自らの思考そのものが、始めることの「出来事＝歴史 Geschichte」として生起すべきことを反省的に問い直すという課題意識とともに成熟してくる。比量性の力学的論理がつくる形而上学の歴史＝体制の「克服 Überwindung」が、なおもその同じ「より力強い」という力学的論理によって企てられても虚しいのであり、革命論的な「移行 Übergang」が、始めることの生起のうちに成就するためには、比量性の力学的論理の体制がその可能性を汲み尽くすこと、すなわちその体制の「完成＝満了」を見届ける必要があるとハイデガーは考える。なぜならそのときにこそ、形而上学の体制そのものが「出来事＝歴史」として露わになり、それをいわば場所として、始めることの生起もまた「出来事＝歴史」となることができるからである。始めることの生起という「出来事＝歴史」が、そのための場所そのものを「出来事＝歴史」として「転回的 kehrig」に生成せしめる。こうした歴史的＝運命的な「転回 Kehre」というハイデガーの思想の背景となっているのが、その生命論的思考が探求していた反転性の力学的論理なのである。死すべきものの始めることとは、根源の一性を所有しないことの「無力 Ohnmacht」を場所として、そこにその根源の一性（「始原的なもの das Anfängliche」）の「超力 Übermacht」を反転的に媒介していくような仕方で生起する。存在者一般の根源の一性に対する人間の根源的有限性は、このようにして、場所論（トポロジー）というかたちをとった反転性の力学的論理にそって、始めることの生起の可能性として、つまり死すべきものに固有な自由のあり方として問われていくのである。

### 第3章 時間の多元性

人間の自己投企によって、存在者一般を存在せしめる力の媒介の働きが担われているという事態は、その「動態」と「伸張」と「安定存立性」が問われていくところでは、ハイデガーの時間論の議論を構成していく。こうして、制作者の形而上学による力の媒介の思想と、生命論的な力の媒介のあり方との対比が、人間における生の生起の時間性＝歴史性の対比として問われていく。前期思想にかけて集中的に問われることになった「日常性」とは、自己現前性という形而上学的な理念のもとにある自己投企において、恒常的現前性＝不死性という存在の理念が無限時間（日・常 All-tag）として生きられてしまっている様態、その非本来的な生の生起の時間性＝歴史性のことである。したがってその議論の背後には、制作者的な力の媒介＝「現実化」の思想に根ざした、比量性の力学的論理の支配に対する問題意識が控えている。日常性において生の本来性が「偽装」されていくこと、つまり、生が自らの非本来性を自らに隠蔽して、それをかえって“生き生きした”あり方だと自認して活動しているところでは、生はますますその本来性から疎外されていくということがハイデガーによって問題にされていく。その際に、そうして昂進してゆく生の「墜落」の動態うちにハイデガーは、「より力強く」という比量性の力学的論理の支配をみており、その問題意識は中期思想にいたって、形而上学の克服という共通の観点にたつて、ニーチェの遠近法的な「力への意志」の思想のうちに捉え直されていくのである。ともかくその生の「偽装」という事態は、力の媒介を担った自己投企がおのれの上に投企する安定存立性と、その伸張の消息としても現れてくる。ハイデガーによると、日常性という「無限な＝終端をもたない」時間性＝歴史性において、人間は「世人 das Man」として自己投企して、「さしあたりたいい」といいつつ、自己欺瞞的にどこまでも自らを伸張していくのであり、それこそが人間の世人的な安定存立性＝不死性の与えられ方なのである。

ハイデガーがそれに対比して考えるのが、死すべきものの本来的な自己投企における力の生命論的媒介、つまり、現実化されえない可能性＝「不可能性」を「可能化」していくための（つまり「無力」を「超力」に反転していくための）、力の「伝承」という動態だったのである。そうした動態に応じて、誕生と死の「間 Zwischen」という「有限な＝終端をもった」伸張のあり方が、中間＝媒体 Mitte としての構造において規定されてくるとき、自己投企の安定存立性は、その媒体性における「脱自態」の分節構造（既在性、将来性、現在）の「統一」をなすものとして問われていく。ここには、制作者的な自己現前性の理念と対照された、脱現前的な「現在」という脱自態を、始めることの生起のための「瞬間」として見いだしていこうとするハイデガーの企図がふくまれているのである。ところで、『存在と時間』でハイデガーは当初、この「有限な＝終端をもった」「間」を媒体とした力の生命論的媒介＝「伝承」を、「遺産の伝承」として捉えていたのである。日常性という「無限な＝終端をもたない」時間性＝歴史性を、人間の生の生起に対する形而上学の歴史的な支配体制と捉えながら、この「遺産」という何かしら“連続するもの”の秩序を暗黙に前提にする考え方において、ハイデガーの生命論的思考はなおも形而上学の影を引きずっていたといえるのであり、「民族」や「共同体」という概念への当時の性急な言及の仕方は、実際そのことを反映していると思われる。人間の〈生命性〉を取り出すのに不可欠な形而上学的な時間図式の脱構築が、このようになおも不十分であったこと反省するなかで、中期思想以降のハイデガーの生命論的思考は、ニーチェ思想との取り組みを踏まえつつ、人間が死すべきものとして生きている生命論的时间を、「永遠なもの」の消息として問うていくことになる。「留まるもの（～であり続けるもの）」という形而上学的な生＝時間の理念と明確に区別しつつ、ハイデガーはその永遠性を、存在者一般を存在せしめる力が、「引き退く」ことでそのつどに「新たに变化したもの」として「回帰」してくるあり方として理解している。これはつまり、形而上学的な一元的な生＝時間の理念に対して、死す

べきものとしての人間の生の生起の、始めることの生起における根底的な新しさを可能にする、多元的な生命論的時間を捉えようとする議論にはかならないのである。

「永遠なもの」における一般性と、死すべきものの多元的な生の生起とのこの時間的關係、いわゆる「脱・存 Ek-sistenz」とは、存在者一般の原初的ロゴスの「一性」と、その「そこ＝現」である死すべきものの有限的思考との存在論的な関係、そしてまた、「始原的なもの」と、その場所となった始めることの生起との力学的関係と並行しているわけだが、後期ハイデガー思想はこの関係性を、原初的ロゴスを「聴くこと」への応答として発声される、死すべきものの「言葉」の可能性として捉え直していくのである。人間が話す言葉は、たいていは概念や意味といった古いものに制約されているものだが、しかしそれでも、死すべきものにおいて語りだされる言葉には、決して古いものに還元されえない新しさの本質が秘められている。その消息を捉えたときにこそ、形而上学的な「思考」が自らに誇るような一元化するロゴス（概念や意味の普遍性）の理念には尽くすことができない、言葉が担う「永遠なもの」の原初的ロゴスの一般性は明らかになるのだし、それを担って生が多元的に生起しうることにおいて、人間の〈生命性〉は認められなければならないのである。ここにいまや、誕生と死の「有限な＝終端をもった」「間」を媒体にして媒介＝「伝承」されていく存在者一般を存在せしめる力の消息が、言葉が自らを断片と化して「伝承」されていくあり方において捉え直されることになる。死すべきもののすぐれた言葉とは、発話者の意図した概念や意味が現前化されて作品となるのではなくて（ましてや“不朽の作品”になるのではなくて）、それが断片となって残され「伝承」されたものの上に、ちょうど自らもそうしたものであったように、新たな別の言葉が開かれていくであろう、死すべきものの新たな別の生が生起し、新たな別の始めることが生起するであろうという生命論的な期待に開かれているものである。内的な多元性を構成するこの別のへの開放性を担っているのが、つまり「永遠なもの」の一般性なのである。こうしてここに示されたあり方こそは、「言葉をもって生きるもの zōon logon echon」としての、死すべきものとしての人間の根底的な自由の消息であるとハイデガーは考えるのである。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、ハイデガー哲学の思想的展開全体にわたってその根底に「生命」の思想が通底していることを明らかにし、ハイデガーにおいて死すべきものとしての人間に立ち現れる人間的生命の固有性を「生命の原初的ロゴス」として剔抉し、このロゴスが言葉として現成する場に立ち会うことを通して、「死すべきものとしての人間」の姿を新たに浮き彫りにしたものである。

全体は三つの章に分かれ、「生命論的思考」という着想を明示する「序」と、ハイデガーの自由論を「場所論」として捉えるべき可能性を示唆する「結び」からなっている。

第1章「存在の両義性」は、『存在と時間』における「存在論的差異」の分析と人間＝現存在の二重性の理解から出発して、「真に人間的に生きる」、「生命の根源的ロゴス」が明らかにされる。こうして、存在と存在者、存在と無、全体と個といった区別に基づく形而上学的認識論では把握不可能な「人間の根源的有限性」が「死すべきものとして生きる人間」として捉え返される。

第2章「力への反転性」では、ハイデガーによるカントの自由論との対決が取り上げられ、カントの自由論は、神による根源的な充実を前提にしているがために、所有という因果的連関に基づく自由論から抜け出せないことが示される。論者はハイデガーの「ピュシス」理解を読み解き、人間の有限性の徴である根源的な「無力」が「超力」へと転じる「力の反転性」を明らかにし、その力が「生の全体性」

に発することを導き出す。

第3章「時間の多元性」では、ハイデガーの時間論が生命論的思考の観点から読み解かれる。「日常性」という在り方が「頹落」として取り出され、次いで「生の本来の動態」として「歴史性」が問題にされる。論者は、ハイデガーが「死」を「不可能性の可能性」と名づけていることを手がかりに、不可能性を引き受ける人間の生の本来性のうちに、既在・現在・将来という脱自態が統一的に分節している様を解明する。ハイデガーの「存在の歴史」が、誕生と死との間の「生命論的時間」として捉えられるわけである。

以上のように、本研究は、「生命論的思考」を導きにしてハイデガー哲学の新たな読解の可能性を切り開き、人間の生および自由に関する独自の思想を展開したものであり、哲学研究の進展に大きく寄与することは疑いえない。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。